

重症心身障害児(者)A病棟に勤務する看護師が考える患者の気分転換 ～面接法による調査～

河津志保子^{1)*} 山根淳子¹⁾ 徳岡美貴¹⁾ 和田由貴子¹⁾ 小林里美¹⁾ 田中英美¹⁾

1) 国立病院機構鳥取医療センター看護部 8病棟

Nurses' understanding of changes in the moods and feelings of children and persons with severe motor and intellectual disabilities

– An interview survey –

Shihoko Kawatsu^{1)*} Junko Yamane¹⁾ Miki Tokuoka¹⁾ Yukiko Wada¹⁾

Satomi Kobayashi¹⁾ Hidemi Tanaka¹⁾

1) The 8th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

*Correspondence: byoutou8@tottori-iryu.hosp.go.jp

要旨

A病棟患者38名中21名に、気分転換不足に対する計画が立てられてきている。しかし、立案されている計画の中には、散歩に出かける、外出・外泊するなどの内容が多く含まれているが、日常的に実現困難な状況である。そこで、患者の気分転換についての看護師の認識を調査するため、看護師10名を対象に半構成的面接を行い、KJ法で分析した。結果、面接の逐語的記録より、486個のキーワードを得、小分類135、中分類17、大分類5を導いた。患者の気分転換についてのA病棟看護師に認識は、「外部からの介入」「阻害要因」「対応策」「介入不足が起こす問題」「期待するもの」から構成され、看護師により認識が様々であった。しかし、看護師らは患者の気分転換不足を問題として捉え、介入の必要度を高く考えていることも分かった。鳥取臨床科学3(1), 13-18, 2010

Abstract

Plans were made for 21 among 38 children and persons with severe mental and intellectual disabilities in Ward A in order to resolve the lack of change in their moods. The plans included going for a walk, going on an outing and staying out overnight; however, none of the plans were ever carried out. To survey how the nurses in Ward A provide care for the inpatients to encourage a change in their moods, ten nurses were selected among the nursing staff members in Ward A, and semi-structured interviews were performed. The verbatim records were analyzed by the KJ method (Kawakita). As a result, 486 key words were extracted, and categorized into 17 groups including 135 subgroups. Subsequently, these key words were integrated into 5 categories: intervention, hindrances, countermeasures, problems originating from insufficient intervention, and expectations. Thus, the nurses demonstrated varied understanding of what changes in the patient's moods are, and what nursing practices would promote a change in the patient's moods, although the nurses' understanding could be classified into 5 categories. The present study demonstrated that nurses regard a change in patient's moods as an important problem should be resolved and considered the necessity of intervention to resolve that problem. Tottori J. Clin. Res. 3(1), XX-XX, 2010

Key Words: 重症心身障害児(者), 半構成的面接, 気分転換, 気分転換不足; children and persons with severe motor and intellectual disabilities, semi-structured interview, change in moods, lack of a change in

はじめに

重症心身障害児(者)の多くは、様々な疾患・障害の重複により自ら周囲とコミュニケーションを図り、刺激を得ることが困難である。及川ら¹⁾は「自ら外界とのコミュニケーションを図ることが困難な場合、子どもが楽しめるような適切な遊びを周囲から提供できなければ、退屈やストレスから自己の世界のなかで楽しむ「遊び」を見つけ出して固執してしまうのではないだろうか。それを周囲の人が、見て不適切、あるいは害があると判断して、無理に止めさせると、言語理解が不十分な子どもほどストレスは増しやすい」と述べている。A病棟でも、超重症児、準超重症児を含め、ほぼ一日中、寝たきり状態の患者が多く、看護師が患者のそばに行き関わらなければ、患者自らが動きコミュニケーションを図ることはほとんどない。そのため、ほとんどの患者には、外界とのコミュニケーションを図り刺激を得ることでストレスを解消し、自己の世界に閉じ込めることがないようにする手段である気分転換が不足していると考えられ、気分転換を踏まえて積極的な看護の関わりが必要となる。

実際に、平成21年4月当初、A病棟患者38名の内、入院期間の短い1名を除いた37人中21人に、気分転換不足に対する計画が上げられている。計画には一度上げられているが、問題解決しないまま計画が終了されていることが多いこともわかった。具体的で実現可能な計画が立てられていないことに問題があると思われた。そこで、A病棟看護師が、それぞれ気分転換をどの様に認識しているか傾向を調査したので、ここに報告する。

用語の定義

KJ法（川喜田）：データをカードに記述し、カードをグループごとにまとめて、図解し、論文等にまとめていく方法。

A病棟患者状況

患者数: 38名.

主な疾患: 脳性麻痺, てんかん, 小頭症.

患者年齢: 7歳~73歳.

入院期間: 平均在院期間は約15年.

大島分類 1: 17名, 2: 5名, 3: 2名, 4: 4名, 5: 5名, 9: 1名, 10: 1名, 11: 1名, 15: 2名.

研究目的

A病棟における、患者の気分転換を、看護師がどのように認識しているのかを明らかにする。

研究方法

1. 研究期間及び内容

- 1) 研究期間: 平成21年4月から平成22年3月.
- 2) データ収集方法: A病棟の合計10名の看護師、准看護師（病棟全スタッフ19名から、看護師長1名、副看護師長2名、研究担当看護師3名、新採用看護師1名、退職予定看護師2名の計9名を除く）を選び対象とし、看護師1名に対し、15分程度の面接を実施した。面接調査は、研究担当者の内、2人が面接者となり、誘導は行わないよう注意して半構成的面接を行った。看護師が、普段、気分転換について感じることを、考えることを自由に答え易いように、個室で実施した。面接内容は、同意を得てテープに録音した。
- 3) データ分析方法: 録音した情報を逐語的記録に起こし、キーワードごとにシートを作成し、KJ法にて分析した。

2. 倫理的配慮

面接調査の結果は研究データとしてのみ使い、個人を特定せず、研究終了後は破棄することを説明し、承諾が得られた人のみ実施した。面接において個人が識別されるような特定の情報を得る場合が想定されるが、それは記号化し個人を特定できないようにした。